

はじめに

毎年 10 月下旬に宇都宮市のマロニエプラザで毎年開かれているふるさと栃木フェアは栃木県内 49 市町村の特産品を一堂に集め展示販売するイベントである。一昨年にこのイベント会場へ足を運び、心惹かれたものはイラストの美しかった「いわむらかずお絵本の丘美術館」のパンフレットであった。絵本作家いわむらかずおさんの美術館が栃木県にあることを知ったのも、栃木県那須郡馬頭町の存在を知ったのもこの時であった。私立の美術館と言えば、栃木県内では那須町に多く存在するのでなぜこの美術館が馬頭町にあるのか関心が沸いたこともあり翌週早速馬頭町へ向かい、いわむらかずお絵本の丘美術館を訪れた。館内に掲示されているいわむらかずおさんのごあいさつ、と言う文章の中には「広い体験フィールドを持った絵本美術館を作りたい、この夢のような計画を実現して下さったのは馬頭町の方々です。趣旨に賛同し熱心に誘致して下さい、開館後はさっそく近隣市町村の方々と一緒に後援会を結成、私たちの活動を支援しています。町は『えほんの丘』フィールドを、県の『子どもの森整備事業』として整備、ともに活動を始めています。」と言う部分があり、町民・町・美術館が協働している点が印象に残った。頭の片隅に追いやられていたこのことをふと思い出し、美術館が地域一丸で造りあげられることもあるのだ、と言うこれまでとは違う視点を与えてくれた馬頭町について知りたいと思うようになった。

いわむらかずお絵本の丘美術館について情報収集するうちに 2000 年には町営の馬頭町広重美術館が開館しており、両美術館の設立には共通するキーパーソンがいることを知った。加えて馬頭町では現在、広重の絵がいきづく町として馬頭町広重美術館を核としたまちづくりが行われていることも分かった。それらにより、当初は本稿で運営など美術館のあり方を問う内容にしようと考えていたものの、資料が集まるにつれ関心と方向性が美術館を取り巻く人々と馬頭町の美術館を核としたまちづくりに移っていった。いわむらかずお絵本の丘美術館の開館を契機として美術品の寄贈を受け、美術館を中心とした観光資源による地域活性化を狙う中山間部の過疎化の進む町が今後どう展開していくべきか、そのあり方を考えたい。